東京学芸大学連続講演会　第9回

「河川絵図に見る江戸時代の多摩川」

小野寺　　淳 氏
茨城大学教育学部・教授

近世絵図研究のきっかけ

子どもの時、家の近所の大学生が地域の子ども達を集めて、いろんなことを教えてくれるサークルがあり、奥多摩へも連れて行ってもらいました。そこで初めて地形図の見方を教えていただきました。地理学を仕事としていますが、それがきっかけの1つになったと思います。その後、しばらく多摩川とは縁がなかったのですが、大学院で河川絵図を研究しようということになり、多摩川の絵図の研究も行いました。今から30年ほど前は、いつ誰が何のために古地図を作ったのかを調べて、古地図の精度や表現の内容を詳しく考察するのが地図史研究の一つの目的でした。古地図を研究することは、地図の発達の歴史を研究することであり、地図史研究イコール地理学史でもあったのです。

1976年、アメリカの地理学者イーフー・トウアン（Yi-Fu. Tuan）が「Humanistic Geography（人文主義地理学）」（*A.A.A.G, 66-2*）という論文を発表しました。この論文を読んで、たいへん刺激を受けました。古地図に即して換言すれば、地図の表現から描いた人がどのような空間認識を持っていたかを読み解くことが必要であると受け取りました。つまり、古地図に書かれた地名の考証や施設などの存在、またそれらの表現を、絵図を作った人がどのような空間認識で読み解くことが必要と感じたのです。

そこでまず、日本全国の川の絵図を調べてみることを始めました。30年前頃には、どのような川の絵図がどこにどれほどあるのかを調べた研究は無かったからです。最初に、大学図書館所蔵の自治体史（市町村史）を、夏休みの2か月間かけて、朝から晩までめくりながら、どんな河川絵図が掲載されているかをチェックしました。河川絵図を見つけると『国書総目録』岩波書店で確認するなど、河川絵図のリスト作りをしました。また当時、私の指導教官であった菊地利夫先生と千葉徳爾先生が建設省、今の国道交通省の京浜工事事務所企画『多摩川誌』の編纂委員をされていたため、多摩川に関する文献や古写真などを収集するアルバイトをさせていただきました。多摩川流域の市町村を回り、流域の歴史、産業、民俗について勉強する良い機会となりました。

刊行された『多摩川誌』は非売品ですが、おそらく東京学芸大学には所蔵されているのではないかと思います。本編に年表・文献目録・写真集の3冊の付録が付いています。私は写真集の作成を手伝わせていただきました。その時に注目したのが、今日皆さんに御紹介する『調布玉川惣画図』です。1988年に多摩市教育委員会から複製が刊行されましたので、これを後ほど広げて、皆さんに見ていただきたいと思います。

地域への関心と教育学部

多摩市で生まれ育った人は少なく、多摩市に住んで子どもを育て、最後はそこで生涯を閉じる。生まれ育った故郷で人生を閉じるのではなく、人生の中で長い時間を過ごし、子どもを育てた地域への愛着が多摩川への関心に結びついたのでしょう。多摩市教育委員会が刊行した『調布玉川惣画図』の複製は、市民に好評であったとお聞きしています。イーフー・トウアンは、地域への愛着をトポフィリアと呼んでいます。

最近、終の棲家はどこだろうかと考えることがあります。地域へのアイデンティティがあるでしょうか。実は、『調布玉川惣画図』はそれを示しています。翻って教育を考える時、教員が地域のことをどれだけ知っているでしょうか。戦前の教員は地域に根付いて、地域のことを調べ、それを子供たちに教えることができたと聞きます。今の教員は人事異動が多く、しかも学校区に居住することを避ける傾向にあるようです。このため、教員が学校区という地域のことをよく知らないことが多いように思います。これは大きな問題ではないでしょうか。教育学部で人文地理学の教員として、「茨城の歴史と文化」、「茨城の地理と風土」、「地域へのアプローチ」などの授業を担当しております。これらの講義には社会科専攻以外の学生さんも受講しており、地域への関心や地域調査法を教えるようにしていますが、現地で説明し体験させることは講義だけでは困難です。その点でも、東京学芸大学の環境教育GPの中で学生さんに地域への関心を向けさせる試みはたいへん有意義であると思います。

江戸時代の河川の役割と絵図の用途

それでは本論に入りたいと思います。江戸時代の河

川絵図は、管見では大小含めると200から300くらいの現存点数になるでしょう。様々な表現をもつ河川絵図を作成目的で分類すると、大きく5つに分けることができます。この表には、5つの分類ごとに代表的な河川絵図を記載しておきました。

1番目は、治水に関する絵図です。江戸時代には水害がしばしば起こりましたので、治水に関する河川絵図が数多く残っております。水害が起こった場所の普請を描いた地図が多いため、多くは短区間の地図であり、上流から河口までを描いたものではありません。

2番目は、堤外地の所有に関する絵図です。江戸時代は堤防で川を固定するのではなく、緩やかに溢れさせる工夫がされていました。洪水で川が乱流し、流路の変更が起こりますと、自村の耕地が川の対岸に移動してしまうことも起こりました。この土地所有を争う時に、地図が必要でした。多くは堤外地の土地所有をめぐる争論の地図であり、この種の河川絵図も全国的に数多く残っています。

3番目は農業用水や飲料水の上水を開削するための計画図などです。ご存知のように、東京学芸大学の北には玉川上水があり、玉川上水の絵図も残されています。

4番目は河川交通に関する絵図です。江戸時代の川は交通路としての役割が重要であり、船あるいは筏など、物や人を運ぶ輸送路としての機能していました。この関係の地図も数多く残っています。特に東北地方に現存する河川絵図の多くは交通の絵図です。

交通に関する絵図の1つに筏流しの絵図があります。筏流しに関する絵図の代表は、木曽川川並絵図です。木曽川の上流から木材を切り出し、木曽川を流し、熱田の白鳥まで運ばれました。この運材を管理するために作成された絵図です。

多摩川の筏流しと「懐中鑑」

多摩川は木曽川と同様に筏輸送に使われました。奥多摩の木材が多摩川を下り川崎へ、川崎から船で江戸の木場へ輸送しました。その数はかなりの数にのぼったようで、筏は一枚と数えるのですが、大体38～40本近い木を束ね、およそ年間5千から6千枚と、東京学芸大学名誉教授の地理学者松村安一先生が研究された成果（『多摩川誌』第5編第1章水運）に記載されています。絵図とは言えないかも知れませんが、これは「懐中鑑」というものです。冊子体になっており、真ん中に多摩川が描かれ、地名と堰が記載されています。ここが玉川上水の羽村堰です。筏が堰を通るときには通行料を支払いました。筏は親方と若い衆がいて、長さによって違いますが大体5～6人で操ります。松村安一先生のご研究によれば、筏師は上流の奥多摩町から現在の府中くらいまで、しかし圧倒的に上流に筏師の分布がみられます。また、多摩川と秋川と比べてみると秋川が3分の2を占めます。筏師は秋川のほうが多かったわけです。羽村堰は通行するとき16文ですが、下流の川崎では26文も払います。羽村の堰は、上流の筏師たちが労役金を出し、堰は修復されていると私は思います。筏は川崎まで辿り着くのに188文払う必要があったことがわかります。このように「懐中鑑」は、筏の通行料を知るために必要な実用的地図であったと思います。これはまだ充分に研究されてないものですから、今後研究されると面白いと思います。このように筏流しは重要な輸送機能を持っていました。筏流しを抜きにしては多摩川を語ることはできないと思います。

さて最後が地誌に関するもので、これから主にお話します『調布玉川惣画図』は、その代表といえます。江戸後期になると江戸の文化人も地誌書を作るようになります。地誌が冊子ではなく、図的表現になったのが『調布玉川惣画図』と考えて良いと思っています。

相沢伴主の『調布玉川惣画図』

『調布玉川惣画図』は上流から描いておりまして、山に雲がかかっていますが、この雲は遠近感を無くすための装置として描いています。雲形を描きながら川沿いを詳細に描いております。関戸村、現在の東京都多摩市関戸の名主であって、文化人であった相沢伴主が考証をし、絵のデッサンをし、それを長谷川雪堤に描かせて1845年に木版刊行されたものです。多摩川1本をまるまる描いています。『図書総目録』にも掲載されているぐらい有名なものです。東京都公文書館、国立国会図書館など実は数多く残っています。木版刊行されたので当然数多く残っているわけですけれども、多摩市教育委員会の『調布玉川惣画図』だけは、川を藍

色で塗ってあります。

この絵図の作成目的は、巻物の序文に書いてあります。天保10年の5月のころ、小河内ダムのあたりに温泉があって、相沢は湯治に行き、多摩川（当時は玉川）の語源を考えました。78歳の時で当時の平均寿命からすると、かなり高齢であったことがわかります。天保10年と15年の2度にわたり玉川の水源を捜査し、名所旧跡を訪ね歩き、それをデッサンするという旅をしました。絵図の最初には、このような動機が記載され、その後に玉川の水源、玉川の地名の由来を記しています。相沢伴主は玉川の絵図に仕立て、榎戸新田に住む榎戸源蔵に見せると、源蔵は木版刊行を勧めました。榎戸新田は奥多摩町大玉の榎戸家の分家が移住し、新田を開発したところです。奥多摩町と縁のある村です。

この絵図は多摩川を中心に上流から下流に向かって描いているため、右岸が巻物を開くと上になります。描く人は左岸から右岸を見て描いたと思われます。多摩川の左岸を歩きながら国分寺の辺りから眺望し、絵図を描いたのでしょう。寒い日でしたら、どこからでも富士山が見えたはずですが、相沢伴主は自分の村の奥に富士山を描きました。戦国時代から続く名家で、生け花の先生でもあり、学問も深く、多芸多趣味な人だったようです。

また相沢伴主に影響を与えたのは太田南畝でした。当時、江戸では『江戸名所図会』、『武蔵名所考』が刊行されていました。これらを読んだ相沢は、学者魂でこれらの地誌書の誤りを正そうと絵図の作成に取り組みます。その中で相沢伴主が特にこだわったのは多摩川の水源の場所です。相沢伴主は現在の小菅川に流れ込む水流、それが玉川の水源だと考証しています。この上流に寛文9年の検地で「玉川」という小字名があったからです。名主をわざわざ呼んできて、これより上流に玉川の小字名があるかを確認しています。これが水源の決め方でした。現在の感覚とは違いますね。相沢伴主が主張した玉川水源説は、実は明治初期に作成された地図に影響を与えました。

江戸時代後期における地誌編纂と『調布玉川惣画図』

もう1つの玉川水源説があります。相沢と同時代人であった山田早苗は『玉川遡源日記』を書き、同じく玉川の水源を考証しています。山田早苗は青梅に生まれ、江戸で商売を営み、隠居後、日記を書きました。山田早苗は「玉」は本来「太婆」であり、玉川は太婆川であって、太婆川の水源に近い三重川原が水源と主張しました。両者がそれぞれ何を根拠にしたかで、水源の場所が異なるわけですが、江戸時代後期になると江戸近郊に住む人たちが、生まれ育った地域に強い関心を寄せていた点が重要だと考えます。江戸ならびにその近郊では、太田南畝をはじめ、相沢伴主や山田早苗のような地方文化人までも地域に対して関心をもち、地誌編纂という学問的な営みをしたのです。

山田早苗の場合は日記形式で書く、それに対して相沢伴主は河川絵図によって表現しようとした。すなわち表現の違いに過ぎないといえるでしょう。

以上で報告を終わりにいたします。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

小野寺　　淳（おのでらあつし）
茨城大学教育学部・教授

1955年、東京都文京区生まれ。筑波大学大学院歴史・人類学研究科単位取得退学、文学博士。著書：『近世河川絵図の研究』古今書院、1991年。共編著：国絵図研究会編（編集委員）『国絵図の世界』柏書房、2005年など。院生時代に多摩川流域の河川絵図を調査した経験があり、多摩川の絵図2点を中心に、江戸時代の多摩川についてお話しいたします。